様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４１３

研究課題名（和文）世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究

研究課題名（英文）Comparative Studies about the Discourses and Caricatures of the Yellow Peril at the Turn-of-the-Century Britain

研究代表者
橋本　順光（Hashimoto, Yorimitsu）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：８０３３４６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：英国での黄禍論をめぐる言説とその戯画が、プロパガンダ装置としてアジアで転用されたことが判明した。西洋の帝国主義を中国人の立場から批判したL・ディキンソン『中国人からの手紙』(1901)は、実際に中国の官僚が書いたと信じられ、岡倉天心やタゴール、辜鴻銘らによってアジア主義に援用された。黄禍論の戯画やその象徴である蛸の図像も、『評論の評論』誌を見る限り、むしろ反論で流用され、ロシアを蛸として描く「滑稽欧亜外交地図」が同誌に掲載されている。同時にそうしたアジア主義の母体であった神智学を契機とし、インドのグルチャラン・シンが浅川巧に案内され、朝鮮半島に共感した文脈を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The discourses and caricatures of the Yellow Peril at the turn-of-the-century Britain were used as a vehicle for Asian counterpropaganda. For instance, Lowes Dickinson's _Letters from John Chinaman_(1901), following the typical Orientalist tradition and criticising Western imperialism, was highly acclaimed and welcomed as a theoretical support for Pan-Asianism, written by an authentic Chinese mandarin. Dickinson's argument against materialism influenced the works of Asian intellectuals such as Kakuzo Okakura, R.Tagore, and Gu Hongming. The illustration of the Yellow Peril was appropriated in Japan as well. In the process, the "History of the Month in Caricature" corner in _the Review of Reviews_ had a global impact with every caricaturist propagating and parodying images and ideologies. For instance, the negative image of Octopus as the Yellow Peril was used by Japanese propagandists as the Russian Peril and circulated via _the Review of Reviews_ in the wake of the Russo-Japanese war.

研究分野：比較文学

キーワード：風刺漫画　蛸　ディキンソン　岡倉覚三(天心)　タゴール　辜鴻銘(Gu Hongming)　プロパガンダ　伍廷芳(Wu Tingfang)

１．研究開始当初の背景

黄色人種の脅威を訴える黄禍論について、従来の研究は、ドイツとアメリカの事例が中心であった。狭義においては、発端となったドイツのヴィルヘルム 2 世が日清戦争後に訴えた黄禍論について、各国の前史と受容を研究した Gollwitzer の古典的研究(1962)、そして Mehnert の外交史研究(1995)があげられる。アメリカでは、黄禍論を広く東アジア系移民に対する人種差別ととらえ、いわゆる排中移民法(1882)と排日移民法(1924)の制定をめぐる外交史研究 (Soennichsen, 2011;Hirobe, 2001)、日米戦争に至るプロパガンダの歴史研究（Dower, 1986)、そこからアジア系アメリカ人の表象と自己成型の相克をめぐる文化史研究(Lee, 1999)、と主に三つの分野で多くの研究が積み重ねられてきた。

一方、英国における黄禍論については、日英同盟(1902)の存在ゆえに、ほとんど注目されてこなかった。それは国内の移民問題が深刻でなく、人種に関するほかの問題に比して、外交や政治において大きな影響を及ぼさなかったことが考えられる。しかし、英国の場合、深刻でなかったからこそ、黄禍論が冒険小説などの娯楽として転用された側面があり、その一端については *Yellow Peril, Collection of British Novels 1895-1913* (2007)および *Yellow Peril, Collection of Historical Sources* (2012)を公刊することで転用の重要性を強調してきた。

この際に、ウィルヘルム２世原案の黄禍論を説明したクナックフスの図像にしても、英国ではむしろパロディとして流通した側面が予想された。たとえば、量産される世界中の風刺漫画を編集して掲載した W・T・ステッドの『評論の評論(*Review of Reviews*)』誌のコーナーでは、そうした逆用とパロディを確認しており、その調査および日本への影響はほとんど研究がなされていない状況であった。

２．研究の目的

上記の状況から、英国における黄禍論の言説と図像の流通と転用、さらにそれが日本において流用された例とその経緯の発掘を目的とした。前者においては、日英の外交文書を参照し、黄禍論に関する調査や検閲が雑誌小説とどのような相関関係にあったかを調査し、後者については、黄禍論とその図像がアジア主義の文脈で転用され、どのような物語が醸成されたのかを明らかにすることを心がけた。

３．研究の方法

研究目的に従い、外交文書、雑誌新聞、小説、図像を統合できるような方法を試みた。具体的には、内外の図書館・文書館で、日英の外交文書および書籍雑誌を調査し、なかでも英国の『評論の評論』誌および日本の『新公論』誌を精査した。あわせて、各美術館の展覧会図録を収集し、それらの知見を参照した。これらの調査に基づき、新聞雑誌への検閲や指示と、それが小説や図像に及ぼす影響と抵抗を考察した。

４．研究成果

（１）　ディキンソンによる反黄禍論とアジアでの受容

黄禍論とアジア主義をめぐる共犯関係の一例として、ディキンソンの『中国人からの手紙』(1901)に注目した。ディキンソンは、いまはほぼ忘れられたに等しいが、ケンブリッジで師事した吉田健一も強調するように、『中国人からの手紙』は広く読まれ、また国際連盟のような国際協調のため尽力した英国の学者である。

ディキンソンは、義和団事件に際し、英国在住の中国人からの投書という設定で、英国をはじめとする西洋列強の帝国主義を批判し、物質や進歩にとらわれない東洋的な価値観を擁護した。ディキンソンの異教的価値観への関心は神智学の秘教的仏教に端を発しており、神智学自体とは距離を置いたものの、それは彼が執筆した古代ギリシアから中国まで異質に思える主題のなかで一貫して見られる傾向といえる。

ディキンソンの『中国人からの手紙』は、18 世紀のたとえば『ペルシア人の手紙』以来の典型的な東洋趣味ではあったが、実際に中国人が書いたと西洋のみならず東洋でも誤解されたこと、そしてそれを東洋の知識人が有効な西洋批判として援用したこと、が大きな相違点であった。

たとえばのちにスコープス裁判で話題となる米国の政治家ブライアンは、駐米公使の伍廷芳が『中国人からの手紙』を書いたと思いこみ、『中国人への手紙』を刊行している。ブライアン以外にも、ガンディー、タゴール、岡倉覚三（天心）らが、『中国人からの手紙』を東洋人による西洋文明批判として高く評価していた。なかでも岡倉はインドでタゴールとともにその著作を読んだらしく、岡倉の『東洋の理想』に序文を書くことになるニーヴェディータことマーガレット・ノーブルの書簡によれば、タゴールと岡倉は『中国人からの手紙』が英国人によって書かれたと知ってひどく落胆したという。岡倉は、その当時、つまり 1902 年の段階で、『中国人からの手紙』に触発された著作をおよそ半分以上仕上げていたというが、それはなんらかのかたちで『東洋の理想』へ転用された可能性が考えられる。

ディキンソンは、1913 年にインドと中国、に次いで日本を訪問しているが、書簡などの

調査から、ロジャー・フライの紹介状により、岡倉覚三と面会していたことが判明した。岡倉はまもなく病死するが、ディキンソンの東洋への旅は、むしろ岡倉の『東洋の理想』とは反対に、アジアは一つではなく、西洋のような統一体ではないという実感をもたらした。ディキンソンは、そうした東洋での記録を帰国後に刊行し、タゴールらを失望させたのである（論文③、発表④、⑩）。

なお、こうした黄禍論が過去のものではなく、今世紀に入って中国の成長と変化を背景にして新たな黄禍論が英国で誕生している例としてニーアル・ファーガソン『BBC 中国―超大国の光と影―』を監修および紹介文を執筆し（図書①）、逆に巨視的な文明興亡史観に立てば、中国やブラジルの成長こそ、今後の歴史が西洋史ではなく、新たな世界の歴史となっていくというアンドリュー・マー『アンドリュー・マーのヒストリー・オブ・ザ・ワールド』（図書②）を監修し、紹介文を執筆した。関連して、英国の黄禍論や帝国主義が現代の日本やアジアで転用された例について、一般向けのコラムを執筆し、学会などで口頭発表を行った（論文①、④、⑥、⑫、⑬、発表⑦、⑧、⑬、⑰）。

（２）　外務省職員による黄禍論小説の刊行と汎アジア的ネットワークの対比

英国における黄禍論と小説の関連をもっとも体現する存在として英国外務省に勤務していたアシュトン＝グァトキンを中心に調査を行った。彼は、日本駐在の経験を生かし、ジョン・パリスの筆名で小説『キモノ』(1921)を刊行し、日本を含む各国で翻訳されるなど、大きな影響を与えた作家でもある。

この『キモノ』は米国で販売されるに際して、日本政府により発禁となったと広告に記載され、それが邦訳および一部新聞報道でも繰り返された。日本側の外交文書の調査によって、発禁は虚偽であり、驚いた駐米大使館から東京の外務省に問い合わせがあり、結果、映画化は許可せぬよう著者に通達していたことが判明した。なお英国の外交文書の調査により、アシュトン＝グァトキンが、日本の帝国主義とりわけ植民地主義とアジア主義について危惧した複数のレポートを提出していたことは判明したが、『キモノ』についての文書は見いだせなかった。

ただ、『キモノ』は、それらのレポートの内容を明らかに反映しており、日英同盟に反対する世論を後押ししたことは、書評などから推定された。たとえばモデルとなった稲・ブリンクリー（志賀直哉の「大津順吉」に登場する絹・ウィーラーのモデルでもある）は、日英同盟が生み出した「成果」としてきわめて否定的に描かれ、さらに日本の前近代的な社会とアジア主義が対置されることで、西洋的な価値観との融和があたかも不可能であるかのような印象操作が『キモノ』には施されている。『キモノ』が日英同盟破棄に影響を及ぼしたわけではないが、英国側が更新をはばかった理由がそこには書き込まれており、結果としてアシュトン＝グァトキンの意図は功を奏し、それらを日本英国の一般読者にわかりやすい娯楽の形で周知させたことは特筆に値するだろう。

この『キモノ』の初版には、英国政府が日英同盟堅持と反ドイツ感情を醸成するために刊行した『新東洋』から日英同盟を肯定する一節が、日本語のままで掲載されている。アシュトン＝グァトキンは『新東洋』で名前こそ出ていないが編集協力をしていたので、いわば政情の変化により徒労におわった宣伝活動への、もってまわった皮肉と考えられるだろう。『新東洋』の編集者は、『評論の評論』誌のステッドの下で修行したロバートソン＝スコットであり、柳田国男が著作の邦訳ほかさまざまな便宜を図ったことで知られている。

この『新東洋』には、鈴木大拙、柳宗悦、バーナード・リーチらが寄稿しているが、おそらくこの雑誌を参考にして接触し、神智学を基礎にした汎アジア的ネットワークを構築しようとしたのが、慶應義塾大学に招聘されたジェイムズ・カズンズである。

1919 年から 1920 年にかけて一年にも満たない滞在ではあったが、カズンズは、大拙、柳、リーチらに接触し、多彩な人脈を築き上げると同時に、神智学協会の日本支部を設立した。インドに本部を置く神智学協会は、インドの英国支配への抵抗などから危険視されており、カズンズの動向もまた日英の官憲に監視されていた。しかし、ほかのインド人亡命者に比して危険ではないと判断され、こうしたネットワークについてはほとんど黙認されることになった。こうして神智学協会には、鈴木大拙や、ジャック・ブリンクリー（『キモノ』のモデルとなった稲の兄弟）、今武平らが参加し、とりわけ今を通じて、神智学は日本の作家に独特な反響を引き起こすことになる。

またカズンズは、柳の友人であるインドの陶芸家グルチャラン・シンを神智学に引き込むが、グルチャラン・シン自身は、三田平凡寺の我楽多宗に加入するなど独自のネットワークを形成し、神智学ともアジア主義とも異なった足跡を示し、英国の模倣や追随とは異なる形で、インドにおける陶芸の基礎を築いた重要な陶芸家である。

グルチャラン・シンは、柳の伝手で朝鮮半島に渡り、浅川巧と出会うなど、いわゆる李朝の白磁に多大な影響を受ける。シーク教徒であるグルチャラン・シンは、聖地であるアムリットサルでの反英運動弾圧事件に衝撃を受けて、英国ではなく日本に留学した可能性が高く、それだけに三・一運動が弾圧された朝鮮半島の人々に共感していたことが、柳の残した記録からもうかがえる。グルチャラン・シンは、政治的な運動からは距離を置い

たが、彼がトレードマークといえるほど使用した蓮の文様は、浅川の所有する青花辰砂蓮花文壺（現在、大阪市立東洋陶磁美術館蔵）を援用したものである（浅川とともに撮影した写真がいまも残っている）。些細なことに思えるが、インドの蓮花文がギリシアのパルメット文の伝播が提唱され、つまりは英国との紐帯が強調されるなかにあって、蓮を東洋的な花として描いた意味は見逃されるべきではないだろう（論文⑧、⑨、発表⑤、⑥、⑪、⑲）。

（３）　黄禍論および帝国主義に呼応したアジア主義小説の展開

19 世紀末、かつてのジンギスカンよろしく、日本人が再び黄禍を引き起こすと英米で警戒された一方で、日本では北進論の隆盛とともに義経が興亜の英雄として再評価された。特に、義経が大陸に渡ってジンギスカンとなったという伝説が喧伝され、1930 年代の大衆小説に題材を提供したのみならず、同じ物語がアメリカ映画 *The Mask of Fu Manchu* (1932)に見られることが判明した（論文②）。

同じようなことが南進論の英雄として再構築された山田長政像にもあてはまる。義経＝ジンギスカン伝説が江戸時代に端を発するように、長政も江戸時代からすでに伝説的な人物として虚構化が進んだが、明治になってポカホンタス伝説およびサラワク王ジェイムズ・ブルック伝との習合により、日本では数少ない異人種間ロマンスとして機能していた可能性が明らかとなった。

こうした長政像の構築は英語でも宣伝され、その結果、南進する日本への警戒という黄禍論の文脈で、オーストラリアに長政が上陸していたという説が 1930 年代のオーストラリアで生まれ、戦後には長政が財宝を隠したという伝説へと変化したことが判明した（(論文⑦、⑩、発表⑨、⑭、⑱)。

（４）　『評論の評論』誌を中心にした風刺画の転載と転用

1890 年創刊の月刊誌『評論の評論』は、前月に刊行された主要な雑誌や新聞の記事を要約して紹介し、主筆のステッドによる独特の取材記事ともあいまって、雑誌新聞の質と量が飛躍的に増加するなかで大きな成功をおさめた。この各紙各論調の要約形式は、日本の『太陽』や『国民之友』、『新公論』など主要雑誌でも踏襲されただけでなく、『評論之評論』誌の記事がそのまま翻訳される例も散見された。

『評論の評論』誌では、創刊まもない頃から世界各国の風刺画を選んで掲載しており、そのアンソロジーは人気コーナーとして、年々拡大し、別冊が刊行されるまでになった。それらのコーナーや別冊は図書館でも欠本が多いことから、古書店などからバックナンバーを購入することで、邦文・英文の解説とともに、1890 年から 1905 年までの風刺画コーナーを *Caricatures and Cartoons, 1890-1905* (2015)の三巻本で復刻した。

同風刺画コーナーの経年調査により、いくつもの風刺画が各国・各時代でトレースされ、あるいは流用されていることが判明した。日本でも雑誌『新公論』が、時に改変と編集を加えながら『評論の評論』の風刺画コーナーをトレースして刊行している。こうして『評論の評論』からトレースされたもっとも有名な例が、日露戦争前夜の国際関係を表現した風刺画として教科書などでも有名な「火中の栗」であろう。これは『中央新聞』が出典だが、そこに書かれたオランダの雑誌が不詳であったが、これは『評論之評論』から転載されていることが判明した。『中央新聞』の名物記者であった水田南陽はロンドンでステッドに面会しているので、その縁もあったかと思われる。

風刺画は、構図をそのまま踏襲しつつ、正反対の内容を風刺することが可能であるため、たとえばクナックフスの黄禍論の絵も、またたくまに各国で転用されており、日本の『東京パック』などの反論として描かれた風刺漫画も掲載されていた。もう一つの例が蛸である。複数の触手で人に襲いかかる図像が典型のように、蛸の姿は、しばしば帝国主義や拡張主義、ひいては黄禍や反中国系移民運動の宣伝として使用されてきた。にもかかわらず、『評論の評論』誌をみる限り、風刺画としての蛸の主題は、日本やインドでも転用されたことが判明した。こうした蛸をめぐる図像が、ジャポニスムの流行やダイオウイカ目撃例の報告とあいまって、たとえば『北斎漫画』の蛸や木村兼葭堂『山海名産図会』の滑川の大蛸が、英国で転用された例を指摘した。日本側でも、日露戦争に際して反ロシアの宣伝として制作された「滑稽欧亜外交地図」が、ロシアの南下を警戒する英国で作成された地図を継承しており、それが『評論の評論』誌に掲載され、その結果、広く知られることになったことが判明した（図書③、論文⑪、発表②、⑫、⑮、⑯）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　13　件）

①　橋本順光、十九世紀奇想小説の連鎖と系譜、ヴィクトリア朝文化研究、査読無、11、2013、112-114

②　橋本順光、境界を越える義経ジンギスカン伝説　大陸雄飛論から冒険小説まで、北海道大学スラブ研究センター『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』、査読有、13、2014、2－17

③　橋本順光、ディキンソンの『中国人からの手紙』(1901)とアジアでのその受容、待兼山論叢文学篇、査読無、48、2014、1-17

④　橋本順光、書評 Ross G. Forman, *China and the Victorian Imagination: Empires Entwined* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013)：Timothy Clark, C. Andrew Gerstle, Aki Ishigami, Akiko Yano (eds.) *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art* (London: British Museum Press, c2013)、ヴィクトリア朝文化研究、査読無、12、2014、167-174

⑤　橋本順光、国際結婚（山田長政）、産経新聞関西版夕刊、査読無、2014 年 11 月 27 日、5-5

⑥　橋本順光、食は人なり（大英帝国プディング）、産経新聞関西版夕刊、査読無、2015 年 2 月 26 日、5-5

⑦　橋本順光、ポカホンタス伝説としての山田長政物語－明治の小説から大映の映画まで－、タイ国日本研究国際シンポジウム 2014 論文報告書、査読有、2015、157-175

⑧　橋本順光、インドの陶芸家グルチャラン・シン（１）柳宗悦との出会いと朝鮮半島への旅、民藝、査読無、747、2015、52-56

⑨　橋本順光、インドの陶芸家グルチャラン・シン（４）我楽多宗への参加と蓮花文様の転用、民藝、査読無、750、2015、52-57

⑩　橋本順光、山田長政の秘宝譚－『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで－、日本研究、査読無、11、2015、99-131

⑪　橋本順光、石上亜紀・矢野明子、春画の学際性をめぐって、ヴィクトリア朝文化研究、査読無、13、2015、225-233

⑫　橋本順光、ミイラ男と輪廻転生、産経新聞関西版朝刊、査読無、2015 年 12 月 7 日、12－12

⑬　橋本順光、小さな天使と悪魔（ショルダー・エンジェル）、産経新聞関西版朝刊、査読無、2016 年 2 月 1 日、17－17

〔学会発表〕（計　19　件）

①　橋本順光、「黄禍」のプロパガンダとパロディ－クナックフスの図像とその流用－、世紀転換期の日英における図像の往還－拡散する *Review of Reviews*－、2013 年 6 月 13 日、大阪大学

②　橋本順光、触手と食指－日英の風刺画におけるタコの表象－、世紀転換期の日英における図像の往還－拡散する *Review of Reviews*－、2013 年 6 月 13 日、大阪大学

③　橋本順光、20 世紀初頭にみる日英印の宣伝活動とその錯綜－神智学・アジア主義・黄禍論－、神戸学院大学人文学会第一回学術講演、2013 年 7 月 17 日、神戸学院大学

④　Yorimitsu Hashimoto, A Modern Symposium? Goldsworthy Lowes Dickinson and Letters from and to a Chinese Official (1901), The International Comparative Literature Association Congress Paris 2013, 2013/July/20, Sorbonne University

⑤　Yorimitsu Hashimoto, A Medium for New India and New Japan? James H. Cousins' Appreciation of Tami Koume and Gurcharan Singh, Enchanted Modernities: Theosophy, Modernism and the Arts: c.1875-1960, 2013/September/26, University of Amsterdam

⑥　Yorimitsu Hashimoto, Universal Brotherhood Revisited: James H. Cousins' Theosophical and Transnational Networks in the 1920s Japan, International Colloquium 'The Future of Comparative Literature', 2013/November/29, University of Tokyo

⑦　Yorimitsu Hashimoto, The Rise and Fall of Morning Glory: the Contrasting Reception of Chiyo's Haiku in the 20th Century, Trajectories of 'Japanese' Texts in the Early Twentieth Century, 2014/March/8, Sophia University Institute of Comparative Culture

⑧　橋本順光、文明の冷却をめぐる想像力の系譜－気象兵器としてのメキシコ湾流から原子爆弾まで－、日本比較文学会第 76 回全国大会、2014 年 6 月 15 日、成蹊大学

⑨　橋本順光、ポカホンタス伝説としての山田長政物語－明治の小説から大映の映画まで－、タイ国日本研究国際シンポジウム 2014、2014 年 8 月 26 日、チュラーロンコーン大学

⑩　Yorimitsu Hashimoto, Chinese Characters for 'a Higher Phase of Civilisation': G. L. Dickinson's Idealistic View of China and Its Appropriation in Asia, The 4th World Conference on Sinology, 201/September/6, Renmin University of China

⑪　橋本順光、英国外交官の黄禍論小説－ジョン・パリスの『キモノ』(1921)とそのモデ

ル稲・ブリンクリー、環流の比較文学のために－日英の環流から多国間の環流へ－、2014年9月26日、大阪大学

⑫ Yorimitsu Hashimoto, From Grasping Monster to Gifted Immigrant? The Changing Cultural Representation of the Octopus, Shanghai Normal University 2014 International Conference of Intercultural Communication , 2014/December/29, Shanghai Normal University

⑬ 橋本順光、台所から世界を変える/食べる/考える 大英帝国プディングとローストビーフ、大阪大学×大阪ガス「アカデミクッキング」、2015年3月24日、大阪ガスクッキングスクール千里

⑭ 橋本順光、山田長政の秘宝譚－『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで－、第6回大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会、2015年6月27日、大阪大学会館

⑮ Yorimitsu Hashimoto, Profile of Sea Raider:Octopus, Caricature and the Yellow Peril, Fear in/of Literature, 2015/July/2, Research Centre for Communication and Culture Universidade Católica Portuguesa

⑯ 橋本順光、蛸をめぐる図像の越境と海賊行為－『山海名産図会』から『喜能会之故真通』を中心に－、視覚文化における越境と海賊行為：文化研究の軌道修正にむけて、2016年7月30日、国際日本文化研究センター

⑰ 橋本順光、インディアン・ロープ・マジックの死と再生　聊斎志異からジョン・コリアまで、＜表象＞と＜文化＞で見る比較文学、2015年8月7日、大阪大学

⑱ 橋本順光、大鳥圭介の『暹羅紀行』と1875年、日タイ交流史研究の新地平－大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)から広がる140年－、2015年9月4日、チュラーロンコーン大学

⑲ Yorimitsu Hashimoto, An Irish Theosophist's Pan-Asianism? James Cousins, Gurcharan Singh and British Secret Agents, Theosophy Across Boundaries, 2015/September/25, Heidelberg Center for American Studies

〔図書〕（計　3　件）
① ニーアル・ファーガソン『BBC 中国―超大国の光と影―』DVD 全3巻監訳・紹介文・丸善、2013年12月

② アンドリュー・マー『アンドリュー・マーのヒストリー・オブ・ザ・ワールド』DVD 全8巻、丸善、2014年12月

③ Yorimitsu Hashimoto, (ed.), *Caricatures and Cartoons, 1890-1905: A History of the World,* 3 volumes (Tokyo: Edition Synapse, 2015)

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本　順光（HASHIMOTO YORIMITSU）
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80334613

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし